

St. Luke's International University Repository

Report of panel discussion: Practice-oriented research to promote quality of nursing care

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 中村, めぐみ, Ozawa, Michiko, Nakamura, Megumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014813

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践の質を高める研究を問う

Practice-Oriented Research to Promote Quality of Nursing Care

小澤道子¹⁾、中村めぐみ²⁾

【はじめに】

昨年“建学の精神の継承”と“実践を重視した看護学の体系化”を目指して本学会が設立され、2年目を迎えた今回のメインテーマは、「実践重視の看護の創造」であった。これを受けて、シンポジウムのテーマは、「実践の質を高める研究を問う」となった。

最初にこのテーマが、決まるまでの過程を紹介する。テーマの発案は、看護が実践活動の上に成り立ち、研究面にも実践性を重視したいと考えると、現在盛んに行われている研究活動が、「実践の質を高める研究」になっているのだろうか？という素朴な問いからであった。そして、その問いはさらに次のように続いた。

「実践現場が研究の場であれば、実践の質が高まるのであろうか？」、言い換えれば、「病院や保健所などの現場でおこなわれている研究が実践の質を高めているのだろうか、研究する者の考え方の検証が優先され、対象の健康上の問題とかけ離れていることはないだろうか？」、では「実践の質とは何なのか？」、そして「実践の質を高める研究の必要条件・十分条件として何が求められているのだろうか？」、また「実践現場の現象や事実をどのように研究活動に組み込んでいけばよいのか？」、「現場は、研究の結果をどのように活用しているのか、また活用していけばよいのか？」、「実践現場の現象や事実と研究としての技法、教育的視点をいかに融合させていけばよいのか？」、さらに「実践現場いかに生活世界に生きているケアする者とされる者をめぐる研究方法とはどういうことであろうか？」、そして「看護ケアの判断や決定の根拠になる有効な『知』とは何か？」…など問いがひろがった。

それならばいっそこれらの問いの答えをシンポジウムで求めていこうということになり、そのまま「実践の質を高める研究を問う」というテーマに決定した。

従って、シンポジウムは、シンポジストも会衆も共々、「実践の質を高める研究を問う」ことに集中した時間であり、その中で、「実践の質を高める研究」の意味、諸問題、特性、方向性、有効なアプローチ、検証法などを考え、新たな見方や考え方の枠組みの幅が得られる時でありたいと願った。

そこで、はじめにシンポジストから各々の立場での御意見の提供を頂き、その後質疑応答、討議が行われた。

本稿は、シンポジウムの座長をつとめた者が、まとめの任にあたった。発表内容の要旨は、聖路加看護学会誌第1巻第2号P12~19に掲載されているので本稿とあわせて参照していただきたいと思う。

【シンポジストの発言】

●研究・教育の立場から：「測定と用具を中心に」

数間 恵子さん (class of 1973)
東京医科歯科大学・医・保健衛生学科

これまでの20年近くの研究の中で、一貫して使用してきた「巻き尺と皮下脂肪厚計」の研究経緯をスライドを交えて紹介された。はじめは、術後早期離床の促進に関する一連の研究において下肢筋力の低下を調べるために採用し、その後、栄養状態の指標として上腕計測値を得るために使用され、現在では、胃ガン術後療養相談活動の中で、患者の行動変容や症状の軽減の自己申告とあわせて相談評価の客観的指標として用いている。

そして、道具が有用であるためには、①その道具によって得たデータの看護における意味付けが可能なこと、②その道具を用いた計測が看護行為に該当すること、③看護の行為として、その道具の使用が日常的に可能なこと、さらに④経済面で低価格の道具であることを論証された。

また、「巻き尺と皮下脂肪厚計」を使用してきた過程で、さまざまな文献と接し、文献の記述が自分の測定経験を通して得た知見と結びつくことによって、単なる知的理解にとどまらず、実感を持って理解できたことは何にも勝る経験であることを強調された。そして、この実

1) 聖路加看護大学

2) 聖路加国際病院

感は、自分の身体で得たデータでの結果の解釈との一致により得られるもので、「わかった!」「あれはそういうことだったのか!」という情緒的な強い「快」の感覚を伴い、この感覚を伴って理解したことは忘れないし、仕事を継続させる動因となること、また、自分でえたデータの解釈を通して、関連文献に対する評価眼も獲得されると言及された。

まとめとして、「ある道具の使い方に習熟することは、その道具を使ってみた世界を自分で構築することといえる。日常の研究・実践活動の中で「あり・なし」の尺度を含め、「測定できるもの・できないことはないか」。或いは「測定できるようにするにはどうすればよいか」、そして、それが「看護としてどのような意味があるか」を常に念頭において、看護の対象となる人々を見る姿勢が必要である。測定は、研究の必須要件であり、実践においても対象をアセスメントする能力の向上に役立つ。自分が道具として使いこなせそうなものが見つかるかどうかによって、その人の研究者としての発展が左右されることを、これから研究の道に進む方々にメッセージとしたい」と述べられた。

●教育・実践の立場から：「褥創患者への看護」

真田 弘美さん (class of 1979)
金沢大学・医・保健学科

褥創発生が減少しない理由には寝具の整えや体位変換などのような基本的看護技術が関与しているのではないかという視点に立ち、看護者の第一の責任が、褥創の原因である圧迫を取り除くことと考え、これまでの褥創予防・管理における圧分散方法の研究過程（本稿では①から⑧とした）を数多くのスライドを用いて明瞭に話された。

〈研究過程〉①「褥創発生危険性が個々に異なるのに2時間毎の体位変換でよいのかと疑問を持ち、仙骨部皮膚の酸素分圧を測定し要因別の体位変換時間の相違を検討した。その結果、圧迫部位の酸素分圧の回復は対象の要因により異なり、2時間毎の体位変換ではなくもっと短時間に変換が必要な人もいた」。次に②「有効な体位変換方法を検討した。基本は骨突起部位に体重をかけないことで、30度側臥位・ギャジベット30度以上にしないという30度ルールをケアに取り入れた」、③「30度ルールを取り入れた前後4ヶ月間の褥創発生率を比較した。その結果発生率は前7.6%・後13.4%となり減少しなかった」、④「なぜ減少しないのかの疑問を解くために実践のケア方法を観察した。その結果、30度ルールは看護者からの強制体位であり、患者の安楽に反していたことと、圧分散寝具の使用方に問題のあることが解った」、次いで⑤「圧分散方式の違いによる褥創発生率を比較した。その結果マット内圧を低くしなければ圧分散寝具として機能しないことが解った」、さらに⑥「床上安楽を保つには圧を分散するだけでなく、寝具で分散することが考えら

れ、そのための寝具の選択と使用方法の基準を作成し、看護者には内圧調整方法を指導した。その結果、褥創発生率は3.3%から0.7%に減少した」、⑦「さらに褥創発生率を減少させるには、圧分散力を高める（マットを柔らかくする）必要があるが、マットを柔らかくすると患者は自力で体動ができない。圧分散力を高める必要性と患者のQOLを高める方法には矛盾が生じた。そこで、この矛盾を解決する寝具の条件を厚みがあり重圧面積が広く、内圧が患者の状態にあわせて調節できる機構を持つこととし、マットの開発に取り組んだ」、⑧「基礎実験の結果からマットを試作し、現在臨床評価を行っている。今のところ、圧分散効果とQOLとの矛盾を解決する見通しが得られている」。

これらの研究を通し「常に患者と共にある看護者が用具を開発すること、つまり看護独自のケアに根拠を持ち、改善していくための研究を行うことが実践を高めることだと信じている」と述べられた。

●臨床・研究の立場から：「臨床での研究と実践」

臨床看護婦としての経験から

川名 典子さん (class of 1976)

聖路加国際病院

聖路加国際病院で主任看護婦・婦長・リエゾン精神看護婦として関わってきた研究を振り返り、考えを述べられた。

これまでに印象深かった看護研究は、病棟スタッフと共に行った褥創に関する研究だった。多くの文献を検索し、その結果から褥創ケアの手順を作り、実際のケアに取り入れていくというまさに実践的な研究であり、そこで得られた知識・技術・知見は自分にも後輩指導にも役だったと話された。しかし、そのケア手順が病院全体に活用されるに至らなかったことから、看護管理者の臨床問題への認識が研究の活用を左右すると思われた。そこで、新病院に移転する際の寝具の決定には、この研究に基づいた意見を述べ、最良と考えられるものを選択でき、研究結果が生かされた時の喜びは忘れられないものとなったと語られた。

次にかかわった研究は、看護量の予測システム作りで、合理的な人員配置を行うための基礎調査だった。この研究は3年の歳月をかけ、婦長達が丸一となって取り組んだ。看護の独自の業務領域である日常生活の援助に焦点を当て、セルフケアレベルをパターン化し、コンピューターシステムにのせて仕事量を推測できるというものであったが、管理者が変わったとたんに頓挫してしまった。理由はいくつかあるが、研究の本当の意義を管理者に理解していただけなかったと考えられた。とは言え、研究を通して多くの知見を得ることができ、データにより自分の看護観もサポートされたことは幸いであったと話された。

現在は、リエゾン精神看護婦として症例研究に携わ

り、学問的興味と臨床看護婦としての満足の双方を満たしているという。また、看護大学で行われた研究の結果を受けて、告知されたがん患者へのサービス「がんと共にゆったり生きる会」を病院ではじめられ、大学での研究を実践に生かすという試みは画期的であったと述べられた。

最後に「臨床で研究結果を生かせるかどうかは管理者の決断によるところが大きく、また研究者、実践家、管理者の3者の意欲と熱意、共働があって、貴重な研究結果が看護受益者の手に届くようになるだろう」と述べられた。

●大学院生の立場から：「NICUの看護に新たな視点を取り入れる試み」

近藤 好枝さん

聖路加看護大学大学院・博士課程

聖路加看護大学大学院博士課程に在学中であり、現在取り組んでいる研究について話された。

子どもを心地よい落ち着いた状態に調整する「なだめる」ことに関心を持った研究の動機は、ある時新生児集中治療室（NICU）で呼吸管理されている子ども達が処置やケアの後に、不安定さを裏づけるような器質的な問題がないにもかかわらず、生理学的に安定を欠いた状態に陥ることに気がついた。そして、何故このような変化が起こるのかについて原因を探るための診察と状態安定のための介入を行ったが納得のいく理由を見つけることができなかった。後に文献からこの変化が耐えられる範囲を越えておこる刺激に対するストレスサインであることがわかった。そこで、早産児の自己調節機能を支持し、落ち着いた状態を早く取り戻すための睡眠促進ケア（なだめる看護ケア）を行うことが処置の影響を少なくするために効果的な方法であると考えられた。

そこで研究の目的は、気管内吸引ケア終了場面における看護婦のなだめる看護ケアの出現状況と早産児の行動状態および生理学的状態への影響を分析することとした。早産児の行動を捉える指標としては、早産児にさらなる刺激を加えない方法で、看護婦であれば誰でも観察できるAlsの早産児行動アセスメントを用い、データ収集は行動観察によって行なわれた。その結果、なだめる看護ケアを行った早産児は、通常のケアに比しストレスサインを殆ど認めなかったことが実証された。

この研究で得られた結果を実践の場に返すためには、①看護婦が生理学的な状態を安定させるために行っているケアが早産児にとっては限界を超えた刺激になり得るという事実の意識化、②器械による生理学的指標に加えて看護婦の五感を通してとらえた早産児の行動状態を判定する能力の重要性、そして、③OJTを通して看護婦への教育を行い、実践上の変化を起こすことが必要と述べられた。

今後の課題は、「なだめる」ケアとして最も多く行わ

れていた「屈曲位にして包み込む」というケアが、何故効果的であったのか、その理由を明らかにしていくことであると結ばれた。

【会場との質疑応答】

会場とのディスカッションでは、最初に実践・研究・教育のリンクをどのようにしていけばよいのかという投げかけがあった。シンポジストからは、最も患者に近いところにおいて、よく患者をみている実践者と共に研究を進めていくこと、そして、研究結果を臨床にフィードバックすることによって、有効なケアの開発やケアの合理化が促進され、業務改善などのメリットが生じること、また管理者のリーダーシップの発揮や、経済性の考慮などの要因も重要であると発言された。

また、臨床の看護管理者から実践の場で研究の意義や有用性をアピールするにはどうしたらよいか、そして研究のための時間の確保をどうするかという問題提起がなされた。これを受けて、アメリカではリサーチ部門が設置されているところもあり、研究をいかにしてバックアップしていくかの姿勢や体制の大切さが議論された。また、大学に所属しながら臨床の研究を継続させてきたシンポジストからは、大学からのバックアップ、つまり研究を進めていく上での実際的なアドバイスが経験的に重要であると話された。さらに、会場から看護系の大学が増えつつあることへの最大の期待として、大学研究室が充実し、それが看護の発展につながってほしいという発言があった。大学教育者であり研究者であるシンポジストからは、研究室はオープンであり、開かれていると発言があった。

最後に会場から、臨床現場の中での疑問や問題を研究者や教育者の力を借りながら、研究につなげていきたいという意味表明があった。

【座長のまとめ】

4名のシンポジストのパワフルでクリエイティブな発表から、いずれも看護実践の中で気づいた疑問が出発点として問題を提起し、その問題を検証するための研究デザインをたて、そして得られた結果の実証を実践の場で行い、また実践での問題（仮説）を検証し、実践で実証するという繰り返しを見事に提示された。そしてこの研究プロセスそのものが実践のケアの質を向上させていることを示され、ケアの前進と学問の前進が同じ地平で論じられた。さらに、これらのプロセスにおける看護管理者の理解とサポート、そして大学教育者の研究指導、看護教育の場での活用が実践の質を高める研究を進める鍵になることが知らされた。

このように実践者／研究者／教育者／管理者が、受益者である患者（クライアント）へのケアの質の向上を目指して協働すること、またそれができる環境を築き、創っていくことが私たちに与えられた大きな課題である

う。

第2回の聖路加看護学会のメインテーマ「実践重視の看護の創造」を具現化するには本学会の会員相互のネットワークを大切に、個人で全てを担おうとするのではなく、各々のキャリアを上手に活用しあって、より質の高いものを開拓していくことであろう。そして、その実現にこそ聖路加看護学会の存在意義があると今後の学会の発展に希望と期待をもった。